IATSS三十周年によせて

IATSSはどのような貢献をしたか

野口　薫　日本大学文理学部教授・千葉大学名誉教授

東京都立大学大学院（心理学専攻）修了、ミュンヘン大学医学光学研究所客員研究員、トリエステ大学心理学研究所客員教授、千葉大学大学院自然科学研究科（デザイン科学）教授を経て、日本大学文理学部・大学院文学研究科（心理学）教授。専門領域は知覚、交通、デザイン心理学。

学際的研究のはしり

創立時のIATSSを思い出すのは楽しい。一口で言うと、私たちにとって実に刺激的であったのです。研究テーマが道路交通を軸としながらも、広い視点を必要とするものばかりで、狭い自分の専攻分野を越えた立場にならなければ、プロジェクトに参加できなかったのです。専門を土俵に喩えれば、どのプロジェクトも土俵が幾重にも重なるものでした。私の専門は心理学ですから、それ自体が多領域に跨がっていたのですが、それをはるかに越える多学的、学際的な研究を求められました。

そうです、思い出しましたが、当時はまだMultidisciplinary とかInterdisciplinaryという言葉も一般的ではなかったのです。IATSS会員一期生すべての人々（「イイヤッツ」とIATSSを発音する人がいました）が他人の土俵で闘うという困難に直面し、それに挑戦していたのです。しかも、この挑戦を会員の皆さんすべてが楽しんでいました。

研究プロジェクトに使われている小会議室は「サロン」と呼ばれ、すばらしい現代絵画が飾られ、その下のサイドボードには誰が選んだのか感性を高めてくれる高品質のコニヤック（時にはアルマニヤック）やウイスキー、シェリーやその他リキュウールが納まっていました。それぞれ好みの飲みものを味わいながら、研究の方針、計画を練ったり、研究結果をどうまとめ、どのような提言をすべきかを熱心に夜遅くまで討議したものでした。

本来の意味の「交通」研究

交通というと交通手段とか交通機関などといった通常狭い意味に捉えられることが多いですが、私たちが対象とした交通は、もっと広く、人と人との交わりまで含む交通（これが本来の意味）であったと言えるでしょう。当時IATSSに大層貢献してくれた、オランダの心理学者ミションさん曰く、「オランダで私は交通心理学者であると言うと、ああ、あなたはセックスを研究しているのか？とじろじろ見つめられるので、そうでないことを説明しなければならなかった」

IATSSはセックスまでは研究しませんでしたが、交通を文化、風土、社会的環境との関係で捉えようとしたところに、一つの特色があったと言えるでしょう。人間科学、社会科学の研究者や新聞社の論説委員、漫画家、精神科医、生理学者が工学系の人々、自動車工学、交通工学、土木工学、電気電子工学、弁護士、建築、デザイン関係の人々と一緒になって、共通のテーマに挑んでいたのです。

交通における「地」の研究

私たちは、とかく目立つ現象（図）に注意を向け、その背景（地）を無視しがちです。交通安全についても、事故にだけ注意を向け、それに関連する現象やその背後にある個人的・社会文化的要因をあまり問題としません。IATSSは交通の図だけではなく、地についても研究を行ってきました。その代表的な例として、辻村明氏（当時、東大社会学教授）をリーダーとする「ソーシャル・スピード」（地域文化特性と運転行動）で1970年代の終わりに行われたプロジェクトをあげることができます。（詳細はここで紹介できませんが、その成果は辻村明編著『高速社会と人間』かんき出版、1980にまとめられています。）